

F
4-31

490.9
Ky-10
1/0.5059



富士川文庫

1697

救民藥方

凶年きよふねんの後のちは必時きよとき疫流えりゅうすること

より言傳ことづてなりあうされども山中やまなかると

醫者いしやもあるき村むらに難儀なんぎのものもあ

きるふれハ享保きやうほう年中飢饉ききんの後時のち

疫流えりゅう行ゆきせし時とき

公こうをよう簡易かんいの藥方やくほうと板行ばんぎやうせし

められそののち天明ていめいの飢饉ききんより右の藥

方ほう寫しやうし福屋ふくやと仰おほせされし



る里去年乃西作は暑食艱難して
命を金くせし老もゆくさき病難と
救屋きろりと心得まんあるはるは
根の享保中板行の藥方と本文
しそ外も同易の方あるは
附録とありし材一續ち行あり
○時疫流行のるは藥を用て其症との
がる屋

一時疫はハ大はぬある黒大豆やういつて

を合甘州一ぬ水とせんとしおきんを吞てよ
右醫瀝と出

一時疫はハ茗荷の根と葉とを洗ひくだき
汁と取り多く吞てよし

右時疫備急方と出

一時疫はハ午葉とをくだき汁とを吞り
茶とんこ粒を二度吞て其上葉の葉と
下握り程火とてあふ里黄色になつた時
茶とんこ水四杯われを以て吞て一度

のみて汗とわきてよし 若葉あくハ枝
よてもよし

右孫真人食忌出

一時夜てぬつ殊の外つよく氣速のどく
強さくるもひ芭蕉の根とわき碎き
汁とあぼ里吞てよし

右肘後備急方出

○一切食物乃毒あたり又いろく乃
草木の葉魚鳥獸なと不煩用て

死とのりる唐方

一切の食物の毒あたり苦むハいり
たる塩とるめ又ハぬるき湯とわきたて
吞てよし 且草木乃葉と喰て毒あて
里あるハ愈あり

右農政全書出

一切此食物の毒あてり胸なる
腹はくくいゑむハ苦参と飯水で能
煎おしうみ食と吐てよし

右 同

一切の食物はあまの苦もむく大麥の粉と
香ばしくいりて素湯で煮て吞てよし

右本草綱目に出

一切の食物はあまの口鼻より血出も
たぐくむく葱とききさみて一合水
で能く煮て冷して置て幾度も吞べし
血乃ちあやむと用てよし

右衛生易簡に出

一切の食物は毒にあたり煩く大に熱なる黒
大豆と水にて煮て幾度も用てよし魚毒
も中里あまの愈よし

右千金方に出

一切の食物の毒は中り煩く赤小豆の黒焼
と粉とく蛤貝と一ツ程の水にて用て
獸の毒にあたりあまの愈よし

右 同

一 菌と食ひあてられあまの忍冬莖葉

共ニ生ズル齒ニ汁ニ吞入スル

右異堅志ニ出

右葉方凶年の節邊土乃若雜食焉

中り又凶年之後疫病流行ノ事あり

其為ノ簡便之方と可撰旨被

依ル諸書之中より致吟味出也

享保十八年十二月

望月三英

丹羽正伯

右者享保十八年丑年飢饉之時疫流行

致有夏町奉行所一板行政 仰付法外

村一被下置の写

右ハ當時諸國村ニ疫病流行致又ハ糧食者

共雜食之甚ムア是里相煩致難保ヲ趣

謝有処前書享保十八年被下置於葉方書

附之其年久敷事故村ニ致遷来ト保

一有之ニ付此度為法故右寫村ニ領主地

頭よりお觸可致

右之趣一被相觸れ

五月

...

附録

○時疫^トノ用ゆべき方

傷寒^{キョウカン}熱病^{ネツビョウ}疫疾^{エキシツ}と云々同病^{ドウビョウ}にて幾つ^{いくつ}も名付^{なづけ}すと知^しべし

一時疫^トニて熱^{ネツ}氣^キあるハ蚯蚓^{ミミズ}の腹^{はら}に土^{つち}をよぐ

さり水^{みづ}を煎^{せん}ト飲^のてよりよく熱^{ネツ}氣^キとさ

まけり其^{その}外^{ほか}の疾^{やまひ}ニても熱^{ネツ}氣^キあり用^{もち}て

よハ蚯蚓^{ミミズ}も頭^{あたま}の方^{ほう}に白^{しろ}き筋^{すじ}あるものハ

よろしにあり

一時疫^トニて熱^{ネツ}はよく頭痛^{づうとう}あるよりハ鷄子^{たまご}一ツ

茶碗の肉にいまききつて熱湯二合又茶を
んの内へいれうききつて一度に飲み夜着
蒲團ととも里汗と取へし

右一條肘後方ニ出

一時疫に老葛の根と生姜と煎し毎日
四五杯で飲てよ

一時疫にて頭痛さむけも薄くありたらハ
柴胡の根と生姜とせん用ゆ
是も一日に四五杯で飲てよ

右二條本草綱目ニ出

一時疫にハ艾葉と五月取て乾置き細く
きざみ一文目甘草ときざみ五分右二味
と常のめく煎で用てよ

右救民妙藥集ニ出

一時疫にハ大麥とあらびききつて煎く
成程こいりて水六合と煎し四合につめ
をさうり酢一勺と入れ温めて三度で用て
汗と取てよ

右蘭書に出

享保十九年の春時疫大に流行せしとき
膏肓風門肺膈灸治せり者八十人
七八人々時疫と免まぬ里或ハ病と受て
も死にぬらざるあり

右讃州府志に出

一時疫と受たるものハ初にぞくも肌をく
頭重く痛に抱身なるものあり夫より病
深く内へ入るに随ひ寒け頭痛ハ止て別

いろいろの苦に増し後ハ大痛に成るる
依之初の内邪氣と外に退て内へいぬる
のも當とあるべし其仕方ハ汗をとる
外ハある此時に藥の貯るハ先ツ夜着
ぬるとりむ里抱身の温里ある米の粥
一搗生薑と多く入なかに用ひ汗と
又葱韭などの雜水もよし是にて汗存分
に出まハ病ハ愈べし縦令全治に至ら
病の氣六七分にとるるも能あり

一切の食物の毒の中にあるハ地と堀
一、ある事三尺計其土をとる水五升を
いれ煮くして水ましし薬を水と
か合飲一

右二條千金方出

一、菌毒魚毒にあたりあるハ橘の實を陰
乾したるを粉とす素湯にて用い
より又木の皮と煎し用いより

一、一切の毒の中にあるハ硫黄とより粉と

一、して素湯にて用いより

一、一切の毒にあたりあるハ紺屋乃染物
の藍をのこしより

右三條救民妙藥集出

Handwritten marks in the bottom left corner of the left page.

Handwritten text in the first column of the table.									
Handwritten text in the second column of the table.									
Handwritten text in the third column of the table.									
Handwritten text in the fourth column of the table.									
Handwritten text in the fifth column of the table.									
Handwritten text in the sixth column of the table.									
Handwritten text in the seventh column of the table.									
Handwritten text in the eighth column of the table.									
Handwritten text in the ninth column of the table.									
Handwritten text in the tenth column of the table.									

